

事例

「食事について相談したい」であったが、本当に聞いて欲しかったことは・・・

3

「病気のことを人に話すのは今日が初めて」という相談者。医師との関係や家族に対する負い目など、食事のこと以外にも悩みを抱えている様子である。

1 相談内容 60代女性 大腸がん ステージⅡ～Ⅲ

2年前に大腸がんで開腹手術を受けた。抗がん剤治療はなく経過観察で現在に至っている。

病気のことは夫と娘以外には、誰にも言っていない。そのため、日常も人に会わないように外出は最低限の買物くらいで、ほとんど家の中にもった生活をしている。今日の相談の予約も直前まで迷っていた。「病気以来、人に話すのは本当に今日が初めてなんです」と緊張気味である。

病院には定期的に受診するも、主治医は傷跡のチェックもせず、腹部に手を当てての診察も一度も受けたことがない。ただパソコン画面を見て「検査結果は心配ない」と次の予約日を伝えるだけ。便がコロコロしてつらいと訴えても「水分が足りないんだわ」の一言。この先、何年生きられるのか聞いても「わかりません」の一言だけで、取りつく島もない。退院するときにも食事についてあまり教えてくれなかったため、どうしたらよいかわからない。

家族に対しては、娘の結婚話が進んでいたのに、自分が病気になったことで断ることになってしまい申し訳ない。

2 相談内容のポイント

- 1 病気について周囲に秘匿しているため、不安・悩みを相談できず一人で抱えている。
- 2 主治医との関係がうまくいっていない。
- 3 食事についてどうしたらよいかわからない
- 4 病気になったことで、娘が結婚話を断ってしまい、本当に申し訳ない。

3 ピアサポーターの対応のポイント

- 発病以来、誰にも話すことのできなかつた不安・悩み・葛藤などの様々な思いを、共感しながらじっくり伺った。
- 主治医との関係について
 - ① 発症部位、開腹手術、経過観察のみと、一連の経過及び主治医の対応はサポーターの体験とも一致し、お互いに納得した。主治医の対応は、それだけ病状的に軽いとの判断があつたのことと自分なりに理解していたことを伝えた。
 - ② この先何年生きられるかは、「人の寿命までではどんな名医でも答えることは難しいでしょうね」と話した。
 - ③ 排便のコントロールは、ほとんどの人の共通の悩みであることを伝えた。水分の摂取や食事も影響するので、これらの記録と排便の記録をすることによって気づくこともあり、さらに主治医にも見せもらうことで、アドバイスや対応を考えていただけるのではないかと。
- 食事については、病院にある参考資料を渡し、主治医を通して栄養士に相談するのもいいのではと伝えた。
- 娘さんの結婚話の件は、ご自身が決断されたことなのでそれで良かったのではないかと私は思いますかと話した。
- 大腸がん患者会を紹介した。

4

ピアサポートの結果

患者会への参加を勧めたところ、「患者会に出なくても、今日で十分です。これで何とかやっていけそうです。本当にありがとうございました」と笑顔になって帰られた。

5

対応したピアサポーターの所感

病気のことを秘匿して、人に会わないようにほとんど家に引きこもるという日常は、相談者にとって本当につらい日々であったことだろう。よくこのピアサポートの場に出てきてくれたと感謝したい思いである。

「病気以来、人に話すのは今日が初めて」ということであったが、思いを吐露することで気持ちが前に向くこともある。今日のこの「扉一枚あけた勇気」が次につながっていくと信じたい。

考察

この事例から学ぶこと

ピアサポーター自身の体験から培った「生きた情報」が、相談者が前向きに生活していくための後押しとなり得る。

【事例の背景と課題】

- 医師とのコミュニケーションギャップ
- がんの社会的偏見
- 退院後の調整問題

がんとともに生活をしていく人たちが増えている現状に鑑みると、これからは法令整備に加えて、患者の意思決定支援が重要なキーワードとなる。「退院調整」から「シームレスな療養支援」への意識変革が必要である。

【講評】

2年前にがん治療を受けたものの、他者に病気のことを話すことは今回が初めてだという緊張気味の相談者に対して、ピアサポーターは共感を持って話をうかがい、相談内容に関しては「私はこのように思う」とIメッセージ（第1人称）で対応している。これは、相談対応の基本である傾聴・共感・理解につながるスキルであるが、とすれば上滑りな対応に陥る可能性がある。しかし、ピアサポーターはピア（同じ体験者）だからこそ、かつて辿ったプロセスを想起しつつ、その体験から培った、マニュアルにはない、相談者が生活を送る上で本当に必要とする生きた情報を提供することが出来たのではないかと思われた。

この事例は、ピアサポートの好事例であるが、場合によっては、がん相談支援室を有効活用するなど、ピアサポーターからつないでいくことも重要だと考える。